
灰かぶり王子

秀介。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰かぶり王子

【Nコード】

N82150

【作者名】

秀介。

【あらすじ】

むかしむかし、とある国にシンデレラという名の少年がおりました。

しかし、彼の本当の名は、別にありました。

彼は、亡国の王子でした。

むかしむかし、とある国には一人の王子がおりました。

近々、王子の婚約者を決めるための舞踏会が開かれます。王子はそのことをよく思っていないく、そして王子には、ある重大な秘密があったのです。

1・亡国「ミッディール王国」

此処はペテロアーヌ王国の下級貴族の暮らす平和な町、アリアス。

吸い込まれそうな青空の元、小さな屋敷の庭で一人の古いドレスを着た、パーマがかった綺麗な金髪の“少年”が、洗濯物を干していた。彼の名前はシンデレラという。

そう、あのシンデレラである。彼にはかの童話の少女と同じように、継母と二人の義姉がいる。そして同じく、三人にこき使われていた。

彼がかの童話の少女と違うのは、性別だけではない。彼は王家の血筋であつた。王家といつても、この国の、ペテロアーヌ王家の血筋ではない。

今は出稼ぎに出ている父とアールイは、今では地図に載ることのない、ミッディール王国という亡国の王家の直系であつた。

アールイは、シャイン大陸の5大王国　今では4大王国だがの一つで、とても平和な国の王家の生き残りだった。

ほんの8年前まで、アールイは王子だった。

彼の父は王と呼ばれ、国が滅んだことを気に病み、そのままこの世を去った母は妃と呼ばれていた。

ミッディール王国が滅んだ原因は、その隣国リリアン王国にあつた。

ミッディール王国の隣に位置するリリアン王国は、面積も人口も生産量もミッディール王国がかなうことはなかった。リリアン王国

の上級貴族の世帯数だけで、ミッデール王国の人口を上回った。

そんなリリアン王国には、大国だからこそその唯一の問題点があった。

それは経済格差である。

支配階級である上級貴族は多いが、被支配階級である農民や漁民はその数を大いに上回る。

その代わりミッデール王国の経済格差はほぼ皆無といってよかった。

皆が平等に財を分け合う社会が成立していた。

支配階級は自分の管理する被支配階級が財を無くせば財を分け与え、被支配階級同士、支配階級同士でも同じことがいえた。

王家が金を湯水のように使うこともなく、王は自ら貧しい民に財を与えた。

しかしリリアン王国の王家はその真逆で、金を湯水のように使い、財政が困難になると多額の課税を国民に強いた。

2・大国「リリアン王国」

リリアン王国の最下層の被支配階級たちのその怒りは、リリアン王家ではなく皆が平等で平和な隣国へと向けられた。

計画は着々と進んでいた。ミッデール王国の王家も国民も、誰もその計画に気が付くことはなかった。

計画が実行されたのは夜だった。

その夜城では舞踏会が開かれていて、王家の人間や貴族たちが優雅に踊っていた。

最初に異変に気が付いたのは、国境の小さな農村に住む農民だったはずだ。その農村を統治する男爵が、城に転がり込んできた。

『隣国の農民たちが、攻め込んで参りした！』

血まみれの領主が這う這うの体で城に転がり込んできたときは、ドレスを着た貴婦人が一人悲鳴を上げた。

その後は目が回るように城から皆が逃げ出した。こっそりホールに出てきていた当時13歳だったアールイは、タキシード姿の紳士に見つかって手を引かれ走り、そして。

城は見る見るうちに炎上し、紳士はアールイを庇い倒れた。アールイは紳士の遺体を一度だけ振り向き、走って走って、命からがら逃げ出した。何とか逃げおおせていた両親に再会し、大好きな母に抱き着いた。

そして、同盟国であつたこのペテロアーヌ王国まで逃げてきたのだ。

ミッディール王国は、隣国の農民たちに全てを盗まれ、全てが燃え尽き、生き物が死に絶えた。逃げ出した者を追いかけて来ることはなかったので、命からがら逃げ出した者も多数いた。しかし少数の人間は、あの紳士同様死んでしまったのだ。

その後は、ミッディール王国襲撃のきっかけとなったりリアン王家が何食わぬ顔で介入し、ミッディール王国の領土を我が物顔で独占した。

アールイの父親は公爵から男爵へと成り下がり、アールイの母親は国が滅んだショックで寝込みそのまま帰らぬ人となった。そしてアールイの父は男爵家の未亡人と再婚し、出稼ぎに出て今に至る。

3 少年「シンデレラ」

ふう、とアールイは安堵の溜め息をつき、腰に手を当てた。

「…終わった……」

洗濯物を干し終わったアールイは、洗濯物の入っていた大きな籠を持って屋敷の中へと入っていく。

屋敷といっても、そこまで大きくはない。とはいえ、屋敷という区分ではそういえるが、農民や漁民の家に比べれば大きい。

そしてアールイが5年前まで暮らしていた城は、この小さな屋敷より比べ物にならないほど大きかった。

アールイは浴室にいた。四つん這いになって、泡の付いたスポンジを片手に風呂掃除をしている。

「あーもう面倒くせ」

とは言いつつも、手を抜くことはしなかった。

母が死んで、父が再婚してからこの5年間は、アールイの生活を大きく変わった。

城にいたときは20人ほどいた使用人も、今では一人もなく自分が使用人のごとき扱いを受け、しかもシンデレラ（灰かぶり姫）と呼ばれている。

いくら髪を切る暇がなく伸びた髪が綺麗な金髪で、黙っていれば美少女のようだとはいっても、あんまりである。

アールイには劣るがかなりの美貌を持つ継母が、嫌みと妬みを込めて付けたあだ名であった。

アールイの背後で、物音がした。

「シンデレラ、お風呂掃除は終わったかしら」

アールイが振り向くと、そこには腕を組んだ継母が立っていた。

「るっせーな。今やってんのが目に入らないんですか？オカーサマ？」

アールイはスポンジを持ってない方の手で鼻の下を擦り、上目遣いで継母を睨み付ける。

「ああ、お目が悪いんですたっけ。あと俺の名前は“灰かぶり姫”じゃなくて“アールイ王子”だっつーの。ついでに頭もお悪いんじゃないんすか？クソババア」

継母は美しいプラチナブロンドを揺らし、キツ、とアールイを睨み付けて、

「目も頭も悪くないわよ！馬鹿にしないでよシンデレラの分際で生意気ね！！」

と吐き捨てるとバン！！と勢いよくドアを閉めて浴室を立ち去った。

「…だーから俺の名前はアールイだっつの」

まだ5分の1も掃除が終わらない広い浴室で、アールイは一人呟いて掃除を再開した。

4・今月末の「舞踏会」

この日、アールイの機嫌は悪かった。

「チッ」

アールイは昼食の買い物から帰ると、買い物籠を台所に置いて溜め息をついた。

近々、王子の結婚相手を決める舞踏会がある。年頃の娘たちが浮き足立つ中、アールイは近くに住む娘たちに、

『シンデレラは王子様と結婚するんでしょ？』

『シンデレラが舞踏会に行くなら私たちに勝ち目はないわね』

と笑われた。

その娘たちを無言睨み付け、アールイは舌打ちして帰ってきた。舞踏会は今月末に開かれる。王子の結婚相手を決めるために、国中の年頃の娘たちがこぞって、あの城壁に囲まれた城下町へと足を運ぶのだ。

王子は大層な美貌の持ち主だという。王子と結婚すれば、玉の輿で、王家に名を連ねることができ、何といっても美しい王子を独占できる。一石三鳥だ。

しかし王子は女に興味がないのか何なのか、どんなに美貌を持つ女が誘っても、一切手を出さないそうだ。巷では「男色趣味なので」は」という噂が流れている。

そこへ先ほどの娘たちの台詞である。アールイにとっては、まさに冗談ではなかった。アールイにそんな趣味はないのだから。

ペテロアーヌ王国に住む年頃の娘たちは皆、舞踏会で王子の目に止まるために美貌を求める。上級貴族の娘たちはエステティシャンやマツサージ師、針子を雇い、この辺りに住む下級貴族の娘ですら新しいドレスを仕立て屋に頼んで作らせる。

そして勿論。

「シンデレラ、舞踏会のために新しいドレスを仕立てて頂戴」

アールイが昼食を作ろうと買ってきた材料を籠から出していると、一人の女がやってきた。

「あ？んなモン近所の仕立て屋にやらせろよ」

仕立て屋に頼む金がないなんてはずがない。下級とはいえ貴族なのだから。

「だって舞踏会が近いからみんながみんな仕立て屋に行くんだもの」

腰に両手を当てて当たり前のようにそう言うてのけるのは、アールイより1つ年上の継母の次女だった。

5・アールイの「才能」

「んなこた知らねえよ」

肩に掛かる、母から譲り受けたプラチナブロンドを右手で払い、義姉はアールイを見据える。

「あなた何でも出来るんだから、ドレスくらい作れるでしょう？」

ドレスくらい、とは言ってくれるものである。

実際、アールイは何でもできた。

城では自分でするなど考えもしなかった料理や裁縫の才能をこの5年間で見事開花させた。

しかし、いくら才能があるとはいえ、普段の家事だけでくたくたになるのである。そこへ、あと1カ月もない舞踏会のためにドレスを作ることを加えたら、寝る時間がなくなってしまふ。

アールイは義姉とはいえ、他人のためにそこまでする勤労奉仕の心を持ち合わせてはいなかった。

「俺はあんたらの召使いじゃねえんだよオネーサマ」

「何よ！シンデレラのくせに！！」

「うるせーよ。キイキイ騒ぐんじゃねえ。あんただけ昼メシ抜きにするぞ」

まさに売り言葉に買い言葉。アールイは義姉に包丁を向けた。

「うつ…とにかく！ドレスは作ってもらわよ！！」

怯んだ義姉は半歩ほど後退り、捨て台詞を吐いて台所を後にした。アールイは義姉が今まで此処にいたのが嘘であるかのように下ごしらえを始めた。

そして、この日の夜。

「…美味しいか？」

そう優しく微笑んで、黒猫に手でミルクをやっているのはアールイだった。それは継母たちには決して見せない表情だ。^{カオ}
この黒猫がミッデール邸にやって来たのは半年前だ。

アールイはその日、継母に言われて近くの仕立て屋に頼んでたドレスを取りに行った。

『…幾らだ？』

『十五フランでございます』

アールイは帰り道を急ぐ。家へ帰っても仕事はまだあるのだから。

四年もやっている、家仕事が板に付いてきたアールイである。クオリティが上がり、速度が上がった。アールイはミッデール家の料理人であり家政婦であり針子であった。

6・「運命」か「必然」か

『みいー』

そんなアールイの帰り道。風の音や婦人たちの話し声に混ざり、聞き覚えのない“音”がした。

『みいー』

まただ。いつも通っている道である。まるで何かの鳴き声のような。そこまで考え、アールイは一つの可能性に思い至った。まさか。

アールイはその“音”のする方へ歩いていく。アールイの予想は見事的中した。そこには一匹の赤い目をした黒い子猫がいた。否、捨てられていたのだ。

『みい？』

『捨てられたのか？可哀想に。ついてこいよ。ミルクでもやる』

そう言つてアールイは黒猫を抱き上げて撫でた。アールイは黒猫にクリスティヌと名付けた。愛称はクリス。屋敷に帰ってきたアールイはクリスにミルクをやった。

最初は怖がつっていたクリスも、半年経った今では見事アールイになつている。

「クリス、」

名を呼んで撫でてやれば、クリスは返事をするように「みいー？」と鳴き、アールイの手に頭を擦り付ける。

「なあクリス、俺の味方はお前だけだよ」

五年前、アールイは大切なものをたくさん失った。家であった城

を失い、居場所であった「王子」という立場を失い、大好きだった母を失い、そして。

「リズは今頃…何してんだか」

言って、自嘲気味に笑った。

リズとは、アールイの許嫁であった少女の名前だ。少女というより王女といった方が語弊がないだろう。いずこの国の王女かも知れない。幾つもあったミッデール王国の同盟国のいずれかの国の王女だろうということしか分からない。当時アールイは政には一切関わっていなかったから、父が家にいない今となっては分かる術はない。

リズと最後に会ったのは9年前、アールイが9歳のときである。

最初に会ったのは確か5歳のときだったとアールイは記憶している。最後に会ったのも最初に会ったのも、ミッデール城であった。

7・回想「出会い」

『アル？あなたの可愛い許嫁さんに「はじめまして」は？』

アールイはリズに初めて会ったとき、同じくらいの年の子供しかも女の子に会うのは初めてだったから、何だか気恥ずかしくて母の背中に隠れた。

『……は……はじめまして』

顔を真っ赤にして、恥ずかしさで泣きそうになりながら、小さな声で漸く挨拶が言えた。

『はじめまして、アールイ王子』

子供ながらもさすが王家の女と言うべきか、ドレスを持ち上げ、優雅にお辞儀をする少女の姿にアールイは壁のようなものを感じた。
『私はお父様のところに行くわね』

アールイはそう言って立ち去る母のドレスを一瞬だけ掴んで、優雅な足取りで歩いていく母の後ろ姿を見つめていた。

はあ、という安堵の溜め息が聞こえてきて、アールイは許嫁に向き直った。

『大人がいるとつかれるわ。それもたこくの王家となるとすんごくつかれる』

それが母の悪口に聞こえ、アールイは何か言いたげな顔をするが、それを全く気にする様子のないリズが言った。

『ねえ、私あなたのことアル、って呼んでもいい？』

ニパツ、と、太陽のように笑った少女に、アールイは今度こそ本当に泣きそうになりながらも、コクンとうなずいた。

『私のことはリズって呼んでね、アル』

5年間の人生の中で、母にしか呼ばれたことのない愛称で女の子に呼ばれ、アールイは恥ずかしさで目が涙でいっぱいになった。

「リズ…」

思い出すと泣けてきた。母もリズも、違う意味で手の届かない存在になってしまった。母はもう二度と会えない。そしてリズには違う意味で会えないのだ。今となっては「王子」という立場に未練はない。しかしリズとの唯一無二の接点が断たれてしまった以上、リズに会うことは許されないのだ。

向こうは王家。そしてこちらは貴族は貴族でも男爵家だ。男爵家の息子が一国の王女に会う機会などたかが知れている。そしてそれを普通「会う」とはいわない。アールイはリズを遠くから「見る」ことしかかなわないのだ。そう考えると、涙が止まらなかった。

8・幾つかの「謎」

「ん…」

アールイはベッドに倒れ込んで声を殺して泣いた。そして、嗚咽が聞こえなくなったかと思えば規則正しい寝息が聞こえてきた。

「みゃー」

クリスはベッドから降りると、アールイの部屋から出た。部屋の外には継母のアテナがいた。

「彼を眠らせるなんて困った猫ね」

「みい？」

クリスは意味が分からないとでもいうかのように首を傾げた。

「惚けたって無駄なんだから。彼は今日はもう目を覚まさないんでしょう？ デイッシー」

アテナは、今は眠っている黒猫の飼い主が付けた名ではない名で、黒猫を呼んだ。それが“彼女”の本当の名前だとでもいうように、それが当たり前のように呼んだ。デイッシー、と。

「みゃー」

黒猫も当たり前のごとく、それに返事をするかのように鳴いた。

「いらっしやいデイッシー」

アテナは両手を前に差し出す。黒猫はアテナの腕に飛び込んだ。

「ご飯をあげるわ」

アテナは先ほどのアールイとはまた違った優しさを孕んだ声で、胸に抱いた黒猫に話しかけた。

此处で数時間前に遡る。アールイは夕食の片付けをしていた。そのほぼ同時刻の、ペテロアーヌ城でのことである。

「セイル様、夕食の準備が整いました」

一人の侍女がある部屋でその部屋の主である男に丁寧な礼をした。

「ああ、今行く」

声変わりが来ていてもおかしくない年齢ではあるが、未だ幼さを残した声で返事をしたこの部屋の主、その人こそペテロアーヌ王国の第一王子にして次期ペテロアーヌ国王セイルである。

「ん？」

9・「濡れ羽色」

セイルは窓に異変を感じ、そのまま窓を開けバルコニーに出た。

「…ああ、お前か」

そこには赤目の鳥がいた。鳥はセイルの声に応えるかのように「カアー」と一声鳴いた。

やけに人馴れした、今にも夜闇に紛れてしまいそうな濡れ羽色の鳥は、白く小さいものをくわえている。この鳥がセイルの元を訪れるのは初めてではない。鳥がくわえているのは手紙だ。

《セイル王子へ》で始まるこの手紙の送り主が誰かは分からない。しかし敵ではない。それだけは分かる。

セイルはこの怪しすぎる手紙を侍女や近衛には見せずに自分の事務机の引き出しにこっそりしまい込んでいた。

鳥が此処へ来るのはこれで2回目だ。

鳥が運ぶ、差出人不明の謎の手紙。今回の手紙の内容に目を通し、セイルはにやりと口角を上げた。

セイルにとって、とても都合の良い内容だった。

これが本当ならば、セイルは最終手段を取らずに済むだけでなく、もう絶対に手に入らない、手の届かない場所にあると思っていたものが手に入る。彼にとってこの手紙は後者の意味の方が遥かに大きかった。

セイルは飛び去る鳥を眺めながら、先程侍女が来た理由と両親を待たせているだろうことを思い出して、たった今届いた“郵便物”

を事務机の引き出しの奥に隠し、自室を後にした。

10・夜明けの「悪夢」

まだ夜も明けきらない、静かな朝。

「ちょっと！シンデレラ？シンデレラ？何処にいるの？」

否、このミッデール邸には女の叫び声が響いていた。継母の次女であるジャンヌが、騒々しく屋敷の廊下を駆け回る。

ああ…もつづるせえ。

ジャンヌの声で目が覚めたアールイである。朝から騒々しいことこの上ない。ベッドから起き出しカーテンを開ければ、空はオレンジと紫のグラデーション。アールイは出窓を開け放す。2階の窓から身を乗り出す。庭にいる鶏の1羽が、寝ぼけているのか「コケ？」と一声鳴いた。あれは確かアリスだ。ふと時計を見ればまだ朝の4時だった。

そういえば。

いつの間に眠ってしまったのだろう。寝ぼけた頭を無理やり起こし、昨夜のことを思い出す。

そうだ。

昔のことを思いだしていたら、急に睡魔に襲われて。それで、眠ってしまったのか。

ドアの外から聞こえてくる足音が段々大きくなっている。アールイがそのことに気付いた次の瞬間。

「まだ寝てたの！？ほら早く脱いで！！」

ドアが勢いよく開いて、大きな声で叫ばれたアールイは耳を塞ぎたくなった。

この距離でその声はねえだろ……。

げんなりするアールイに は重ねて叫ぶ。

「早く脱ぎなさい、って言うてるでしょ!？」

アールイはジャンヌに対し、恋愛感情や性的欲求を感じたことは一切なかったが、しかしそれでも、此処は一応男であるところのアールイの部屋であり、義姉ではあるが一応異性であるところのジャンヌと二人きりな状況なわけで。

どう考えても間違いが起きるとは思えなかったが、何故か躊躇してしまうアールイである。

「何で脱がなきゃいけないんだよ」

「あなたに頼みがあるの」

何だこのめっちゃイイ笑顔。ヤな予感しかしねえ。

ニコツ、と効果音が付きそうな程綺麗に笑う義姉の姿に、アールイは悪寒がし冷や汗を掻いた。ざりつ、と後ずさったアールイは、自分の後ろには出窓しかないことを知っている。コツン、と、靴の踵が壁に当たった。

げっ。

絶体絶命。みるみるうちにアールイの顔は青ざめていく。口はまるで魚のようにパクパクと開閉を繰り返し、首は幼子が「イヤイヤ」をするように左右に繰り返し振られている。

「ちよっ、マジやめ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8215o/>

灰かぶり王子

2011年4月17日20時39分発行